

## タブーの島の トビウオ漁

竹川 大介  
(たけかわ たいすけ)

北九州市立大学教授

焼畑作りにすら参加できない。

「男の魚」の主要捕獲対象であるマグロやサワラの仲間は「男の魚」とよばれ、とりわけ丁重にあつかわれる。魚は浜でウロコを取ることすら許されず、大きかろうが重かろうが、かならず丸のまま村にも帰られる。

さらに不思議なことに、漁に出る男たちはこの「男の魚」を食べてはならないのである。「男の魚」は老人や子ども、そして漁に出ない女たちのための食料なのだ。

## 大型回遊魚を連れてくる

南の島というと、常夏のイメージを思い浮かべる人が多いだろう。しかし実際には、赤道から離れるにしたがい島々に周期的な気候の変化があらわれ、作物や海産物にもそれぞれの旬が生じる。

南太平洋バヌアツ共和国の南部にフツナ島という小さな島がある。直径わずか四キロメートル、しかし標高が六六六メートルもあるプリン型をしたこの隆起珊瑚礁の島は、もつとも近い隣島から九〇キロメートルもなれた濃紺の外洋に浮かんでいる。想像できるだろうか、そんな島に数百人あまりの人びとが、少なくとも六〇〇年以上も前から生活してきたのである。

この島の暮らしにとつて欠かすことができない海洋資源が、季節的に島を訪れるトビウオたちである。八月から翌年の一月にかけてトビウオは島の風下に集まつてくる。村の男たちは、月のない夜にカヌーの上から明かりを使って、トビウオをおびき寄せ、タモ網で捕獲する。

トビウオの群れはマグロやサワラ、シイラ、カマスなどの大型回遊魚を連れてくる。三時間ほどのトビウオ漁が終わると、朝方まで大型回遊魚釣りが続けられる。ラマガとよばれるこの漁は、数ある漁法の中でもっとも重要なものとされ、多くのタブーによつて成り立つている。

そうタブー、つまり禁忌(きんき)である。そもそもタブーといふことばはポリネシア語に由来する。ポリネシア文化の影響を受けたフツナ島にも、生活の端々までさまざまなタブーが張りめぐらされている。

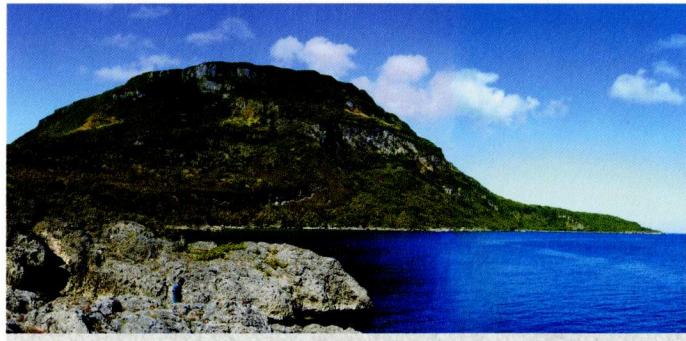
たとえば、ラマガの期間、漁に出かける男たちは浜で寝起きをともにしなければならない。またこの時期の魚は農作物と相性が悪い。とくにヤムイモとタロイモは精靈の力を多く宿している重要な食料とされ、漁のときに海にもつて行つてはならないし、漁に出る人は

ところでわたしは大学院生のころに台湾の南東沖にある蘭嶼に滞在したことがある。蘭嶼もまたトビウオ漁が有名な島で、カヌーを使った魚灯漁をおこない、トビウオを餌に大型回遊魚を捕獲し、そして男女によつて異なる魚の食物禁忌があつた。

七五〇〇キロメートルも離れたふたつの小島で、トビウオにまつわるとてもよく似た文化が守られている。これが偶然なのか、はたまた同じ太平洋文化の流れをくむものなのか、興味は尽きない。

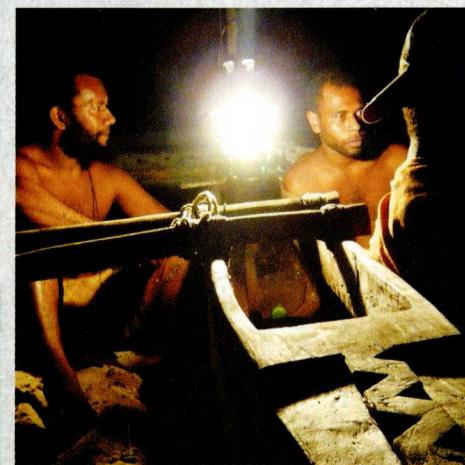
蘭嶼は北緯二二度、フツナ島は南緯一九度、最初に述べたように、年間をとおして周期的な季節変化が見られる地域である。

フツナの人びとは、雨期と乾期をつかさどる精靈が半年ごとに海と島を行き来すると語る。精靈は乾期に海の魚を繁殖させ、雨期には畠に豊饒をもたらす。もしその循環が乱れると、島に暮らす人びとには死活問題となる。トビウオの群れは季節周期の象徴である。彼らはタブーといふことばを用いて、人知を超えた自然のサイクルを畏れ敬ってきた。かたやわたしたちは、地球レベルの気候変化にすら鈍感になつてしまつたようだ。現代人に必要なのはエコロジーよりタブーなのかもしれない。

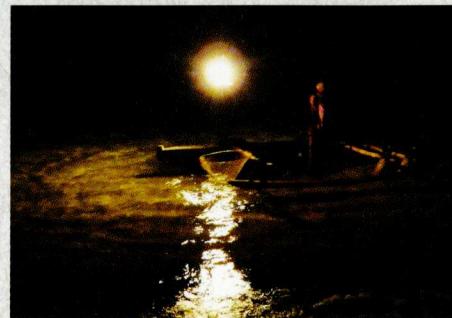


隆起珊瑚礁の崖に囲まれたフツナ島

夜になって  
浜に集まる男たち



タモ網とランプをのせ  
トビウオ漁に出るカヌー



トビウオの束をもつ娘



マグロは村に運ぶまで切ったり地面につけたりしてはいけない

### トビウオ (学名: *Exocoetidae*)

捕食者である大型回遊魚から逃れる際に海面を滑空することからこの名がある。日本では沖縄列島から、太平洋の黒潮流域、日本海の対馬海流域の沿岸部を回遊する。刺網や定置網によって群れ単位で大量に捕獲されることが多く、各地で干物などの保存食やダシとして利用されている。またトビウオの特産地である屋久島では、伝統的なトビウオ招きの儀礼がある。フツナ島ではハマトビウオ属 (*Cypselurus* spp.) の7種のトビウオが確認された。

